

12 . 不思議な橋 (ミンダナオのティルライ)

私は、家を出る前、母と二人の姉妹が悲嘆にくれて泣いていたのを覚えています。急に私はびっくりするような場所を見つけてしまいました。私はそんな場所を今まで想像もしたことがなかったのです。空気はペパーミントのようにさわやかでした。空は今まで見た中で一番青いし、草原は、一番の緑色をしていました。色鮮やかな鳥たちが、木から木へ飛び回り、大変調和の旋律でさえずりまですし、蝶たちは色鮮やかな花から花へ飛び回りました。その場所全体は、不思議な魔法のような雰囲気、まるで夢の中にしか存在しないような所でした。

大変遠くに、明るい光を見つけて、私はその方向に歩き始めました。しかし、私は歩いているのに、私の足はまったく地面に触れていなくて、空中を歩いているようだ気がしました。私は天使のように浮いていました。「私は夢を見ているのだろうか? 」と不思議に思いました。「どうして私は、霊のように浮いているのだろうか? 」

ついに私は、険しい崖の端に着きました。私はきらめく川が下のほうを流れているのを見下ろしました。そのきらめきは、虹のひとつひとつの色に反射していました。大きな滝が、白いふわふわした雲につながっていて、その源が天国にあり、この色とりどりの川に注いでいたのです。滝が奏でる、甘く、心地よい音は、私の耳には音楽のように聞こえていました。「私は、天国にいるに違いない。」と私はつぶやきました。

すると私は目の前に、渓谷や川を渡るように石橋が伸びて、反対側の崖まで続いているのに気がきました。遠い橋の反対側の端は、あらゆる形態の、色とりどりで、さまざまな格好をした、私には数え切れない数の捨てられた服が、積み上げられていたのです。

美しい少女が私のそばを静かに通って、その石橋を渡って歩いて行きました。彼女が反対側に着いた時、彼女は自分の服を全て捨てて、大きな山に積み上げたのです。その少女は微笑んで、大きな戸の方に歩きました。それはゆっくり開いて、輝く美しい庭を見せ、そこにある色とりどりの花は、宇宙のひとつひとつの色に反映していました。少女はひとりぼっちではありませんでした。大変多くの人々が、彼女と、活気のある庭へ一緒に入ってゆきました。みんな裸で、顔には満足した微笑と穏やかな表情をうかべていました。

私は必死になって、その美しい庭に入ろうとしました。私には、そこが全世界の中で、この上ない幸福で穏やかで、幸せな場所のように思えたのです。

私は、自分の足を石橋に乗せました。しかし、私の足が、橋に触れるや否や、急に魔法のように、揺らめいて、空中に消えてしまったのです。私は急いで、バランスを回復させ、私が深い渓谷に落ちるのを食い止めました。

その石橋は、ゆらめいてまた現れました。そこで私はもうひとつの足を慎重に橋の上に置きました。しかし、同じことが起こって、橋はまた消えてしまったのです。

私はがっかりして、渓谷の向こうで、幸せな人びとが輝く美しい庭を歩いているのを見ました。私は彼らに加わって、素晴らしい旅をしたかったです。私は心に悲しみを感じました。何かが私に、今は橋を渡る時ではない、と告げてくれました。

私は崖の端から振りかえって、私の家族の所へ帰ることにしました。彼らはおそらく今までさびしくしていることだと思ったのです。

私がおの日遅く家に帰った時、私の母と二人の姉妹はまだ、悲嘆にくれて泣いていました。

「どいして、まだ泣いているんですか? 」と私が聞きました。

私の母は私を見て驚き、言いました。「お前は、死んだと思っていた! 」

そこで、私は母と二人の姉妹に、私の気分最高の旅、私が訪ねた天国の素晴らしい場所について、そして私の渡らせてもらえなかった不思議な橋のことをすべて語りました。